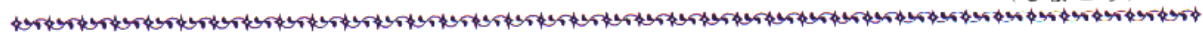




# 曙光



(しよこう)



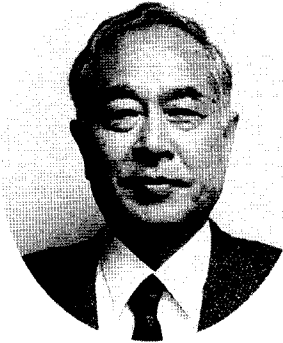
1998.10.1  
東北大学大学教育研究センター広報 No.6



保健体育（ゴルフ）の授業風景



全学教育偶感	副総長 小山 貞夫 ……	2
学生時代の川内の思い出に加えて	大学教育研究センター長 星宮 望 ……	4
東北大学の LL の歩み	名誉教授 佐藤 旭 ……	5
学生からの投稿	経済学部3年生 中島 裕幸 ……	7
	医学部3年生 白戸 崇 ……	8
	農学部3年生 本田 文乃 ……	9
主な行事予定 ……		10



## 全学教育偶感

副総長（総務・企画担当） 小山 貞 夫

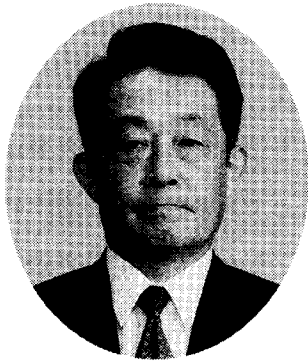
私が東北大学に入ったのは1955年であるから、もう40年以上前のことである。その頃はまだ教養部もなければ、全学の1・2年生を一か所に集めて教育するという形でのキャンパスの統合もなかった。私が所属した法学部の1・2年生は、教育学部を除く他の文系諸学部、理・農学部と共に、富沢の三神峰にある第一教養部で学んだ。そういう点からは、私の1・2年生の頃は施設の面では勿論、教育システムという点でもまだまだ不完全きわまりないものであった。敗戦から10年しか経っていなかったからである。しかしにもかかわらず、60歳を越えた今振り返ってみて、私にとって最も思い出も多く、また私という人格を作り決定したのも大部分がこの時期であったと信じている。知的好奇心の赴くままに学び（乱読し）、時間を忘れて友人と語り、サークル活動に熱中し、思い、悩み、楽しんだ。私は今でもこの頃をなつかしく思い出すだけでなく、このような生活を与えてくれた東北大学に感謝を持ち続けている。

それだけに、教師となって最初の職場であった教養部でも、またその後移籍した法学部でも、学生達には1・2年生時代の意義深さを語り続けてきたつもりである。その中で常に言ってきたことは、勉学であれ、サークル活動であれ、思い切って全力を挙げてぶつかりなさい、ただ無目的にノホホンと与えられたことだけを行う生活は止めなさい、目先のバーを跳び越えることだけを目標にせず、自分で定めた遠い先の目標に自分の足で一歩一歩歩む努力をなさい、ということであった。

今の東北大学の全学教育は、勿論改善の余地がないとは言えないが、私達の頃の教養部教育に比べれば、施設を含めて格段の差をもって優れたものになっていると信じている。しかし制度がどんなに良くても、それを動かす人の主体性が欠けていれば、その制度は死んでしまう。要は、全学教育を与える側の教師の情熱・能力と共に、それを受ける側の主体的な問いかけ、求め方であろう。かつての教養部時代にも繰り返し述べられ、いまだに叫び続けられている教養課程、全学教育の「つまらなさ」「無意義さ」は 本当なのだろうか。専門教育はそんなに「面白く」「有意義」なのだろうか。もし後者が正しければ、何故そうなのだろうか。全学教育で得た基礎的知識や学問への姿勢が基礎になって初めて専門教育が面白く有意義になってはいないかということも真剣に反省せねばならないが、それ以上に初めから全学教育はつまらぬ必要悪、単なる通過点としてきめつけてはいないだろうか。講義を受け身で聴くだけで、自ら問いかけることを怠っていないだろうか。聴く方の関心の狭さ、

意欲の低さが全学教育を「つまらなく」していないのだろうか。教師は水呑み場までつれて行くことはできても、水を呑みたいという意欲のない人間に水を呑ませることは至難なことなのである。

もう一つ重要なことがある。学問に対して過大な期待をしていないかということである。私自身もそうであったが、青年にとって最も重要なことは「いかに生きるか」ということであり、多くの者はその解答を学問・講義に求める傾向がある。真面目な学生ほどその傾向が強い。しかし、学問、さらにはそれを授ける講義にそれを求めることは、「ないものねだり」であることを自覚すべきである。天文学あるいは機械工学を窮めると「人生いかに生きべきか」がわかるのであろうか。むしろ講義で、「学問」の名で、道、生き方を説くこと自体が危険なことなのである。真理（これこそ学問の対象である）と正義は別なのである。そうであれば、講義に「ないものねだり」をしておいて、望むものを与えてくれぬからと言って、相手を非難する誤りはすぐにも気付かれよう。この際、大学・大学教育というものを、その限界を含めて、一度じっくり考えてほしい。その解答を得ることだけでも大学に入った意義があると私は信じているからである。



## 学生時代の川内の思い出に加えて

大学教育研究センター長 星 宮 望

私は、安保闘争で大荒れの1960年4月に東北大学工学部に入学しました。入学してしばらくは講義がまともに行えない状態が続きました。また、大学院博士課程を修了したのが大学紛争たけなわの1969年3月で、助手に採用されて7ヶ月ほどたったある夜（小生が宿直をしていた夜）に工学部が封鎖されるという経験を致しました。このように、現在と比較すると大学を取り巻く環境が落ち着かない時代であり、生活も豊かでなかったといえるかもしれませんが、それでも、将来に対しての夢を持っていたように思います。後になって言われてみるとちょうど高度経済成長期への入り口であったようです。

当時の川内北キャンパスは、駐留軍から返還されたばかりの白い板塀の兵舎を利用した教室で東北大学川内分校と呼ばれていました。1年生の成績で希望の学科に行けるかどうかが決まりますので、当時の私は、授業にはほとんど出席しながらも学友会弓道部での修練を中心とした生活を送っていました。その後の1962年に北海道大学で開催された第1回の国立七大学総合体育大会の時には大将（正式にはオチという）として出場して優勝することができたことは大きな感激でした。

このようなサークル優先の川内の学生生活でしたが、文系の科目・理系の科目に限らず、何人かの先生方から教えていただいたことで記憶していることは、「疑問を持つことの大切さ」です。それまでの高校時代には、教科書に書いてあることや先生の話に疑問を持つことはほとんどありませんでしたが、「教科書に書いてあることや先生の話に疑問を持つことが学問の始めである」という趣旨の話も多く先生方から聞いたことを覚えています。これは極めて大切なことではないでしょうか。その後、学部に進学し、さらに大学院へと進むにしたがって、その意味の重要性がわかってきました。

小生が育った時代は「追いつけ追い越せ」の時代でした。これからは、従来のように欧米を模範として追いかけるという図式が通用しない時代です。追いつけ追い越せから脱却し、右にゆくか左にゆくかを自ら決定しなければならないことが多くなるでしょう。それらを判断するための基準となる「モノサシ」の基礎を作ることがこの川内キャンパスでの諸君の青春時代の重要な課題ではないでしょうか？ それには、多くの書物にふれて、かつ、疑問を持ち、自ら考える習慣を身につけることが大切ではないでしょうか？

おわりにもう一つの課題として考えていただきたいことは、「世話役の大切さ」です。小生のたくさんの方の友人の中で、社会に出てからリーダーシップを発揮している人の多くは、周囲の人々（年上であれ年下であれ）に対する「世話役」を苦にしないボランティア精神の豊かな人です。いくら頭が良く鋭い人だと思われても、自分のことばかりを考えている人には誰も心から従わないからでしょう。この川内キャンパスで、二度とない青春を謳歌しつつ生涯をかける目標・夢を育んで欲しいと思います。それとともに、上述の人生のモノサシの基礎を作り上げてくれるよう心から期待しております。



## 東北大学のLLの歩み

名誉教授 佐藤 旭

表題については旧教養部時代のドイツ語の沼田先生、フランス語の故大木先生がそもそもの始まりからよく知っておられるので、先生方の在職中に書き残していただくと思いつつも果たせなかったことは小生の怠慢でありました。前大学教育研究センター長江幡先生の依頼で小生が執筆するようにはめになりましたが、言語文化部助手の佐々木氏が最適任者であることは言うまでもありません。

現在の川北のハンドボールコート脇の桜の木のあたりに米軍キャンプの放送局がありました。これを利用してS38年に、松下電器産業からの寄付というかたちでオープンTR 40台を収容した1教室と録音スタジオで発足したのがそもそもの始まりであります。最初の職員は大浦氏で、一年半程で長谷川氏に変わりました。

S45年に講義棟Aの4階に第1・2LL（各60席）が完成し、本格的な歩みが始まりました。この時から語学事務にいた佐々木氏がその後のLL運営の機関車となったのであります。

当時の第1・2LLは現在のような映像機器などは備わっていない、当時主流の背面管理でありました。この教室の創設にあたっては、大木先生が中心になって機種選定をされたと聞いております。

小生の本学への赴任はS46年で、即、運営委員会の委員長に選出され、それから長いことLLの運営に佐々木氏らと関わることになりました。S48年、第3LLが故池田事務長のお力添えにより設置されました（56席）。

第3LLができた数年後からわが国でも映像時代が教育の現場にも波及してきました。

LL教室もVTRは勿論のこと、LDプレーヤー、そして聴覚障害者のために英語の字幕を画面に出す装置、また近年では、MDプレーヤー……等設備はどんどん進化してきております。

LL教室を利用する教官も昔に比べれば驚異的に増加しました。「あんなものは不要だ！」と元氣よく述べられた先生もおりましたが、皮肉にもそういう先生ほどLLを利用されました。

ところで、川北キャンパスの講義棟は最近、特に春学期に教室数が不足しております。入学試験、課外活動等で普通教室を減らせない状況が続いており、LL教室の増設は、非常に困難になっております。また、講義棟が計画された当時には考えられない程の電力消費量の増加で、いまだに最上階の第1～3LLには空調設備がありません。梅雨末期、暗幕を閉めた中で扇風機をフル回転させ、授業を行わざるをえない状態です。これからは学校といえども空調のみならず、インテリジェントビル並の

設備が常識的にならねばと考えております。総長、副総長、星宮センター長にはその辺の努力を期待したいところであります。

LL 不足を補足するような教室を実現したのが講義棟 A205 (103名収容) であります。語学の授業で音声教材・映像教材の両者を利用できる教室であり、なおかつ普通の講義室としても利用できる教室として H8 年に増設しました。教材提示装置もありますが、大画面でコンピュータから文字も提示でき、天井にはりめぐらされたスピーカーからは劇場なみの音響が響き渡ります。

そして、忘れてならないのは、H5 年度に設置した第 4 (30席)、5 (60席)、6 (30席) LL 教室であります。特に、第 4LL は 32人が利用できる自習教室として筑波大学をモデルに S52年から 4年計画で設けられた教室でしたが、東北大学としては最初の外国語修得のための PC 教室に改造されました。しかし、先程述べた通り、教室不足で 60人以上用の PC 教室は増設できないでおり、旧帝大中最低の設備であります。

1LL~6LL、その他の設備及び 3700点余りの視聴覚教材を使用し、現在週 100コマの授業、述べ 3200人余りの学生が語学の授業を受けております。また、4LL 教室は週 6 コマ自習時間として開放し、ビデオ、LD、PC (インターネット、その他) の視聴に供しております。この教室の立地条件が良くなれば、利用者は大幅に増えると思われれます。

紙幅の関係でこれ以上の事は述べられませんが、教室と設備及び管理運営に関する現状のルールが確立したのは、初代センター長の浅尾先生の時の平成 6 年でありました。

LL を管理する言語文化部は旧来の枠組みにとらわれず、教官構成も多様化し、それだけ多様な能力集団が集まりつつあり、多様な発展の可能性を秘めていると言えるでしょう。

益々の御発展をお祈り申し上げます。

## 学生からの投稿



## 全学教育への提言

経済学部3年生 中島裕幸

全学教育科目と専門教育科目とを対比させて考えたとき、専門教育科目はどうしても知識や考え方を習得することに重点をおかざるをえないと思う。経済学部は半期ごとに完結している科目が多いために、(私にとっては)短い期間に習得するためには、暗記中心となりがちである。経済の様々な分野を学ぶには仕方がないことであるが…。

そういう位置にあると考えている専門科目に対し、全学教育科目は、知的好奇心を刺激してくれる科目だと考えていた。大学受験のときは、さんざん暗記主体の勉強をし、頭が固くなっているような気がしていたから、その頭に、いろいろな分野のセンスを吹き込んで柔軟にしてくれるものと思っていた。

ところが、正直にいうと実際の授業は、つまらないものであった。教官の方々が授業されている講義は、当然御自分の専門分野であるから、どうしても専門知識が多くなり、知識主体型の授業になっていた。初学者のための授業、名前どおりの全学教育とはとても思えない講義が多かったのである。

また、授業自体だけでなく、環境的にも問題があった。大人数の履修者の割に教室がせまい。それに、特に第二外国語に言える事であるが、一年間に同一科目の開講が少ない。

と、今まで不満ばかり述べてきたが、ここで前向きに、具体的な提言を述べてみたい。

第一の提言は、最初に述べたように、全学教

育科目は初学者向けと心得、その科目の特定の分野のみを教えるのは極力避け、その科目のあり様を教えるようにする。できれば、NHKスペシャルのように、初めて学ぶ者にも興味を湧かせるような授業がほしい。

第二の提言は、同一講義時に、同じ名称の講義を、複数の教官により、複数の教室で開講する。学生に教官の選択権を持たせるのである。

第三の提言は、単位の評価は、複数の教官が共同で行う。つまり、レポートなり、期末試験なりを共同作業で行い、評価により客観性を持たせ、講義間の不平等をなくするのである。私もそうであったが、学生はえてして、講義を評価の甘い教官で選びがちである。この方法によれば、より面白く、分かりやすいということを基準に、講義を、教官を選ぶことになるだろう。

現在、教官や講義に対する評価を行うために、学生にアンケートをとる大学もある。しかし、これはあまり客観的では無いのではないか。学生は、評価の甘い教官に高い評価をつけるだろうし、科目自体の難易が高ければ、理解しづらいので、厳しい評価になるかもしれないからである。それよりも私が提言した方法は客観性に優れていると思っている。

もちろん、大学側の事情は全く考慮せずに述べてしまったし、教官側だけではなく学生側の自覚も必要となってくるのは当然であるが、私のアイデアはどうでしょうか。

## 全学教育を終えて

医学部3年生 白戸 崇

この2年間、自分は何を学んできたのだろうかかと振り返ってみる。思い出すことは、ほとんど全てが専門科目のことであり、全学教育科目のことは、ほとんど頭に残っていない。全学教育科目とは本来、専門教育ばかりを詰め込んだ人材育成を避ける為に設けられていると聞かすが、自分を思い返してみる限り、その成果は、全く上がっていないと思われる。

入学当初、私は秘かに大学教育に期待をしていた。英語嫌いな私に何かきっかけを与えてくれる講義が大学にはあるだろうと思っていた。しかし、入学して一週間で期待はもろくも崩れ去ってしまう。なぜなら、既にクラス分けをされたクラスに据えられ、しかも、授業は高校とほとんど変わらない、訳すだけのつまらないものだったからである。興味をひかない講義を聞かなければいけないのは、苦痛以外の何物でもなかった。その後も期待は裏切られ続け、私の英語嫌いは今も直っていない。

他の講義も同様で興味をひくものは一つとしてなかった。これはなぜだろうか。原因としては、医学部のカリキュラムが、科目がほとんど選択できないものになっているためであろう。大学の講義とは『自ら選んだ科目を進んで学習する』姿勢が必要であると考えていた。しかし、実際はシラバスを見て受けてみたいと思った講

義が必修科目と重なって受けられないことが多く、単位を取るために仕方なく他の講義を受けることになってしまう。その講義もやはり興味をもてないものなのでこれでは学習意欲がそがれてしまい結果として何も頭に残らない。それでも、単位は取れるので頭は真っ白のまま全学教育が終わってしまう。このような悪循環が起きていたので『自ら進んで学習する』姿勢を持てなかったと思われる。これを改善するには、必修科目を少し減らす等の対処をして選択に幅を持たせるといいだろう。そうすることで、高校や義務教育のような、ある意味で『上から押しつける』講義とは違った大学らしい講義になると思う。また、講義内容の充実も計るべきで、そのためには担当教官もある程度学生に評価されるようにしたらいいと思う。そして教官は出席で学生を縛らずに、講義内容で学生を魅了して欲しい。

現状の全学教育科目は、まだまだ改善の余地があると思う。しかし、改善の余地があるということは、ある程度自由に講義を変更できることの裏返しでもあると思う。それを生かした講義を教官には期待したい。それが、より良い講義、ひいてはより良い大学教育につながっていくと思う。





## 全学教育に対する要望

農学部3年生 本田文乃

農学部では2年次で全学教育科目が終了しました。もっと専門的なことを学びたいと思ったことはありましたが、それなりに興味ある内容の授業を履習することもできて、無駄なことをしていると感じたことはありません。ただ、少々不満に思ったことや、是非改善してほしいと感じたことがいくつかあります。実現するにあたっては多々問題はあるでしょうが、それはさておいて講議を受けた側の学生の率直な感想・要望として述べさせていただきます。

まず、教養教育科目の種類を増やしてほしいです。もっと多彩な講議があれば選択の幅も広がり、ただ単位を得るためにとるのではなくより意義のあるものとなるでしょう。例えば、私自身もそうですが政治のことについてほとんど無知な若者達が多いので、現在進行形の日本の政治についての講議というのがもっとあったらどうでしょうか。また、芸術関係の授業も充実させてほしいです。絵画美術だけではなく音楽史を扱う授業や舞台芸術論のようなもの、あるいは日本の古典芸能についての授業などの開設を希望します。

次に、第2外国語のクラス数について疑問を抱きました。ドイツ語だけが開設クラス数が特別に多かったのですが、ドイツ語の人气が特別に高いとは思えません。クラス数はもっと均一にすべきではないでしょうか。近年全国的にど

の大学でも中国語の人气が高まっているのだそうですが、東北大でも例にもれず私が1年の時は中国語を希望する人が大変多くありました。せっかく2年間も勉強するのだから、多少の日常会話を覚えてその国を旅行したいと思う人も沢山いるでしょう。人气のある外国語のクラスを早く増設してほしいです。

最後になりますが、1、2年の授業配分について、偏りがありすぎるとかなり強く感じました。農学部は1、2、4セメスターが授業数が少なく大変暇があったのに対し、3セメスターは物理、化学、生物科学の3つの実験が重なり、そこだけが際立って忙しかったことが印象的です。物理実験があることにも少々の疑問を抱いていたため、いっそのことなくしてしまうか、せめて他のセメスターに移すかして、3つも重ならないようにしてほしいとせつに願います。また、全学教育科目からは話が離れてしまいましたが、1年次に農学部の専門的な授業をもっと取り入れるべきです。現在そこところは改善されつつあるようですが、私達の代に間に合わなかったのは少々残念に思います。

これから入ってくる後輩達が東北大あるいは農学部に失望しないよう、迅速かつ柔軟に学生の希望を取り入れる大学となることを願ってやみません。

## 主 な 行 事 予 定

平成10年度全学教育科目授業等にかかる後期日程は以下のとおりである。

10月1日(木)～12月22日(火)	第2・4セメスター授業
10月14日(水)	履修カード提出期限
10月14日(水)	履修科目届提出期限
10月31日(土)～11月3日(火)	大学祭(1日休講)
12月24日(木)～1月6日(水)	冬季休業
1月7日(木)～1月27日(水)	第2・4セメスター授業
1月14日(木)	大学入試センター試験実施に伴う休講
1月28日(木)～2月10日(水)	補講
2月12日(金)～	学期末休業

### 「曙光」(しょうこう)の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読みたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える輩はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

(命名及び表紙題字) 前東北大学総長 西 澤 潤 一

発 行 東北大学大学教育研究センター

Research Center for Higher Education,

Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内

Tel (022) 217-7533

Fax (022) 217-7540

インターネットホームページアドレス <http://www.high-edu.tohoku.ac.jp/>